

夏休みの課題といえば恒例の読書感想文。昨年までの夏休みにどんな本の感想文を書いてきましたか？
本選びから始まって、最後まで読み終えて、自分自身と内容に対峙し、感想をまとめ、文章にして、文字にして、清書する。この作業には時間がかかりますし、集中力も必要です。また、誰かに読まれると思うと気恥ずかしさもでてきます。「大変そう」と、どうしても後まわしにしてしまう人に向けて、今回は読書感想文Q&Aで読書感想文のハードルが、少しでも下がるような特集号をお送りします。

読書感想文



Q.「課題図書」「自由図書」ってなんですか？

A.読書感想文コンクールの主催者が指定した本を読んで書くのが「課題読書」です。本の専門家の先生方が、新しく出版されたたくさんの本の中から、年齢に合わせて、多くの感動を得られたり新たな知識を得られたりする本をフィクション、ノンフィクション、外国作品など幅広く選んだものです。一方、自分で読みたい本を自由に選んで読書感想文を書くのが「自由読書」です。フィクションでも、ノンフィクションでもかまいません。

Q.感想文は、何のために書くのですか？

A.書くことによって考えを深められるからです。読書感想文を書くことを通して思考の世界へ導かれ、筆者が言いたかったことに思いをめぐらせたり、わからなかったことを解決したりできるのです。「読書感想文」は考える読書ともいわれます。また、どんなに強く心を動かされても、時がたてばその記憶はうすれてしまいます。読書感想文は自分自身の記録です。読み返すことによって、いつでも「感動した自分」に出会うことができるの

Q.どんな本を読んだらいいのかわかりません；

A.思いっきり楽しめたり、自分を見つめなおしたり、新しいことを教えられたり……。自分の心を突き動かしてくれる本が、その人にとっての「良い本」だといえます。自分に合った、心を動かされる本を探してみましょう。迷ったら自分のことをよく知っている人、家族や、担任の先生、部活の先生、図書館司書に相談してみましょう。友達と話し合うのもいいですね。

Q.本の本文や解説などを引用してもいいですか？

A.できるだけ自分のことばを使って書くようにしましょう。確かに解説やあとがきなどは、本の世界をより深く解説するために参考になることがあります。ですから、場合によっては引用する必要が出てくるかもしれませんが、そのときには、どうしても必要な部分だけ「」（カッコ）でくくりましょう。

Q.題名はどうつけたらいいですか？

A.本を選ぶとき、本の題名を見ながら「おもしろいかな？」とか「読んでみようかな？」と考えることはありませんか？魅力的な題名は人を引き付ける力があります。せっかく書いた読書感想文ですから、人が読んでみたくするような題名を考えましょう。自分が一番感動したことやもっとも言いたいことの、中心となることばを考えて題名にするといいでしょう。

Q.何をどう書けばいいのかわかりません；

A.本を読んで自分がどこに感動したのか、なぜ感動したのか考えてみましょう。そして、もう一度本を読んでみましょう。自分の生き方や経験と、本の世界とを照らし合わせると、いろいろなことが見えてきます。感じたこと、思ったこと、連想したことなどを忘れないうちにメモをとっておきましょう。そのメモを補ったり、順番を入れ替え、どう書いたら自分の心の動きにぴったりするか？それが人にうまく伝わるかを考えてみましょう。

課題図書



読書感想文の開催趣旨について

- ◇子どもや若者が本に親しむ機会をつくり、読書の楽しさ、すばらしさを体験させ、読書の習慣化を図る。
- ◇より深く読書し、読書の感動を文章に表現することをおして、豊かな人間性や考える力を育む。
- 更に、自分の考えを正しい日本語で表現する力を養う。

『スウィッシュ！ Swish！』

藤ノ木 優 著
徳間書店 1,980円



スウィッシュはボールがリングにまったく触れない完璧なシュート。澄んだ音は味方を奮い立たせ、試合の流れを引き寄せる。息詰まる攻防であるほど、一本のスウィッシュが勝敗を左右する。しかし、決められる選手はほんのひと握り。そんなシュートを打ったこともないバスケット部の愛奈は、骨折してしまったエースの羽瑠とともに高校生最後の大会に挑む。

運藤が苦手なキャプテンと骨折したエース。二人の絆が奇跡を起こす。感動の青春バスケット小説！

『ノアハム・ガーデンズの家』

ペネロパライブラリー 著 斎藤倫子 訳
ゴブリン書房 1,980円



ノアハム・ガーデンズの家
THE HOUSE IN NO-HAM GARDENS
ペネロパ・ライブラリー 斎藤倫子 訳
ゴブリン書房

1970年代初頭の英国、オックスフォード。14歳のクレアは、古い家具や調度品、書籍であふれた大きな家に、大おばたちと暮らしている。高齢のふたりにかわって、家事や家計の切り盛りをするのはクレアの役目だ。ある日、クレアは物置のトランクのなかに、彩色された木の板を見つける。それはかつて、人類学者だった曾祖父がニューギニアから持ちかえたものだった。

『若さ』について、そして『年を取るということ』について描いた作品。

『平和のうぶごえ』

早志百合子 著
毎日新聞出版 2,420円



広島市の被爆少年少女の体験手記を集めた『原爆の子』（1951年初版、岩波文庫）は、投爆直後の貴重な証言集として、発売当時から国内外に衝撃を与え、現在も読み継がれる。1972年、執筆者らのグループが発足し、被爆者の人生の苦悩を分かち合い、励まし合ってきた。著者が自らの被爆者人生を振り返りながら、仲間とともに「原爆の子」らがこの80年をどのように生き抜いたのか、伝える。

生死をさまよう、でも「命さえあればどうにかなる」そう確信できるはず。